

PROSOUND REVIEW

Studio Monitor Headphones YAMAHA HPH-MT8 HPH-MT5



HPH-MT8

HPH-MT5W

未知の音との出会いは言葉にできない緊張と期待、そして喜びがある。同時に、それを手に取った者は新しい音に試されているともまた言えるだろう。軸足をどちらに置くのか、悩むところだが試される側に立つ、受け身のほうが圧倒的に楽しく、視界が開けることは確か。小さな枠へ囚われの身となった自らを解放し、新しい出会いへ進んで飛び込みたいと思う。2016年12月、「ヤマハ」から新しいヘッドホンがリリースされた。初登場から数えると3度目の作品群である。幸運なことに、これまで全機種を聴く機会を得たが、どれにも発見と得心があった。そして今回、実際に使ってみて感じたのは、歩幅のあ

レビュアー:半澤公一

ヘッドフォンに 求める基本条件

今回登場したのはフラッグシップを謳う「HPH-MT8」。そして弟分となる「HPH-MT5」および「HPH-MT5W」の3機種。前者はブラックのみ、後者はブラックとホワイト仕様とがあり、その識別のためかWの文字が末尾に付けられている。

以前にも書いたことがあったかも知れないが、筆者は音響という仕事で必要な時以外、耳へのダメージを懸念してヘッドフォンやイヤフォンの類は普段避けている。ただし機材としてのそれらには興味津々で、東で新しいと聞けば走り、西に珍しいと呼べば駆けつけ奔走する。が、楽しみはさておき業務で使うとなれば、それに見合うものはさほど多くない。私見だが選択の条件を挙げておくと、

- (1) モニタリングできる資質を持っていること
- (2) 音圧によらず質感が変化せずニアであること
- (3) 少音量でも腰くだけしないこと
- (4) 音場形状が球形もしくはそれに近いこと
- (5) 堅牢性を含め使い勝手が良いこと

こうしたふるいにかかると現場に持ち出せるものは大きく絞られるのが実際だ。ただ現場では、常に新しいものが求め続けられていることもまた事実。これまで「ヤマハ」のモデルは全機種ともに期待を上回る結果を出している。どのようなパフォーマンスが展開するかが楽しみだ。

HPH-MT8 基本仕様

モデル「HPH-MT8」は、ダイナミック型で密閉方式を採用。45mmの大口径ダイアフラムにはCCAW(銅被膜のアル

ミニウム線)を用いたボイスコイル仕様を前モデルから踏襲し、軽量なこのコイル素材により振動レスポンスが向上。より高い再現性能やクリアな質感が期待できる。

周波数特性は15Hzから28kHzまでと前モデルの「HPH-MT8」の25kHzを上回っている。案内資料に記されたテーマは「Legend Transformed ~原音忠実再生」。これについては大きく肯くものがあった。後述する。

外観ではカップ中央の音叉ロゴやヘッドバンド上の沈め込んだ「YAMAHA」文字は健在。気付くところでは、イヤパッドが真円から楕円形へと変わっている。刷新されたのはケーブルだ。これまでの固定式から着脱できる方式を採用。L側パッドからのみの片出しのため、取付けは1回で済む。着脱はこれまでになかった行程だが、面倒に感じるどころか、それを超



付属の合皮製キャ
リングバッグ収納
時はコンパクトに



ヘッドバンド上の
ロゴも健在

えてメリットは大きい。まず、同梱されるストレートとコイルタイプ2種のケーブルから好みや現場環境に合わせて選択できる(コイルケーブルの同梱は『HPH-MT8』のみ)。また持ち運びや撤収もスムーズになる。近頃主流になりつつあるが、喜ばれるジャッジだろう。個人的には可能であれば音質にこだわったケーブルに交換してみたい。

プロの耳を満足させる条件

今回は事前試聴を経て頻繁に現場へと持ち出すことにした。期待したのは、ずばり「サウンド」。といっても音色のことではなくライブ中、高い音圧環境のなかで、いかにクリアな聴き取りができるか。そこが評価のポイントである。検聴する内容は、ハウスのスピーカーから出ているミックスと同じもので、状況としては周囲からのマスキングでモニタリング環境の視点からはヘッドフォンにとってきわめて過酷といえる。しかし、やはり聴こえなくてはいけなのが業務用。当然それによって耳が痛くなってはならない。

ここで功を奏したと思われるのが「HPH-MT8」が持つインピーダンスと出力音圧レベル。37Ωと前モデルから

10Ωを超えて下げており、102dBのSPLと相まって音離れがきわめて良い。求める音が苦もなく耳へ飛び込んでくる。これは単に高能率ゆえ大きな音が出やすいといった単純なことではなく、例えば古いスピーカーユニットを再着磁した際、能率の向上とともに音質が飛躍的に向上することから見ても、両者は音量の大小だけに置き換えられない関係が存在する。このねらいは成功と言えるだろう。

そして音質の仕上げも秀逸だ。色付けの少ないストレートさでいながら聴きやすく、また音が近い。これもドライパーが耳元にあるからといったことではなく、全帯域の速度が揃っていると言える正確だろうか。そのため速く聴こえるのである。さらに音に棘がないことも美点。ありがちながスピード感を出せば神経質なサウンドになり、まるやかさを追求すれば、今度は重くなる。これまでヘッドフォンという再生機の構造上、両立が難しいものと半ば諦めていたのだが、驚いたのが正直なところである。

堅牢性は申し分なかった。ご存知のとおり慌ただしい現場では、図らずもコンソールから床へと落下させてしまうことがある。今回もそうした場面に

幾度か遭遇しているが、3機種ともにケロッとしている。頼もしい。

弟分の「HPH-MT5」はダイヤフラム径が40mm、ケーブルは3mのストレートのみ付属といった違い。サウンドは上位機のDNAを継いでおり、質感は同じベクトルを持ち合わせている。全体の鳴りがコンパクトに収まる傾向があるものの、先にも述べた過酷なSRでのモニタリングといった切り口で見れば「HPH-MT5」のほうが軽快に扱える場面もあるだろう。試しに教えているクラスに持ち込んでみたが、生徒はみな興味を示し、我先に聴き比べをして自分なりの意見や評価を交換し合っている。何か訴えるものがあるのだろう。

おわりに

今回の試聴では進化したマシンに出会うことができ、気を良くしているのだが、佳作の登場はこのところのヘッドフォンやイヤフォンの空前ともいえるブームと無関係ではないだろう。街や電車内でもオーバーイヤー型を目にする機会も多くなった。それはプロ機についても同じことが言え、明らかに現場で見る品種は多くなり、ヘッドフォン談義も聞こえてくる。また、昨今の若手エンジニアがオフ時に音を聴く際にもスピーカーではなく、スマートフォンに接続されたものが主流となっている。その現象が好ましいか否かはさておき、これからのエンジニアのためにもメーカーは善し悪しを提案するその前に、正しい再生音を逸脱しない範囲内で切磋琢磨してほしいと切に願う次第である。



新モデルの登場で全5機種(うち2モデルはホワイト仕様)のラインナップとなった「MT Series」。先行モデルの「HPH-MT7 / HPH-MT7W」とイヤパッドの形状が異なる(左から、HPH-MT8 / HPH-MT7 / HPH-MT7W / HPH-MT5 / HPH-MT5W)